

私が義兄さんと出会ったのは、確か十三、四歳の頃だったと記憶しています。

義兄さん、というのは私の姉の夫に当たる人のことです。地元で小さいながら商売をしていた私の家に、婿として迎え入れられたのです。

初めて彼を見たのは二人の結婚式の時でした。白無垢を着てすまし顔をした姉の隣に、凛と背筋を伸ばして歩く彼の姿を未だによく覚えています。

義兄さんはこの後、私たち家族と同居をして店を手伝うことになっていました。その頃の私はとくに尋常小学校を卒業して店を手伝っていましたから、出会ったばかりの男性と生活を共にしなければならなかったのです。そのことに対し、少しばかりの緊張を覚えていました。

だから一生に一度の晴れ姿を着た親族よりも、その隣にいる初対面の他人をまじまじと見つめていたのです。今思い返せばそんな自分の姿は滑稽だったことでしょう。

桜の綺麗な時候でしたから、二人の結婚を祝うかのように花びらが散っていました。それに重なる皺ひとつ無い紋服と、義兄さんの横顔。そればかりをよく覚えています。

私は人見知りする性分で、店を手伝っている時も表に立って客の相手をする、というよりは裏で黙々と作業をしていることの方が多いくらいでした。

だから義兄さんが初めて私の家に来た時も、挨拶もせず自分の部屋でそつと息を潜めているだけでした。性格など言い訳にならないのは分かっていますが、十近く年上の男性に話しかける勇氣なんて、その時の自分は持ち合わせていなかったのです。

その日は一日、普段は読みもしない小難しい本を引っ張り出してきてはばらばらと捲っていました。私がそんな様子だからきつと話す切っ掛けを、と氣遣ってくれたのでしょうか。日が沈み始めた頃にトントン、と障子を叩く音がしました。はい、と返事をする、聞こえてきたのは聞き慣れない男性の声。

「……幸仁くん、僕です。夕飯ができたそうです」

当時の私のような声変わりのしきっていない柔らかな声とも、父のような大きいだけのしゃがれ声とも違う、落ち着いていて甘やかな青年の声。恐らくあの義兄だろうと察しはつきましましたが、急な来訪に驚いて戸を開けるとどこか返事も碌にできませんでした。情けない話です。

暫くそうしていると、からり、と戸惑うように障子が開きました。僅かにできた隙間から覗いたのは、横に長い一重の瞳と、障子の枠にかけられた骨張った手。初めて屋根の下で見る義兄さんは結婚式の時のような儼かな雰囲気とは違い柔和で、それでいてどこか物憂げなところがありました。

すみません、すぐ行きますと答えると、彼の薄い唇に小さい笑みが浮かびました。その微笑が少し強張っていて、ああ、この人も緊張しているのか、なんてぼんやりと思っていました。

そうして二人広間へと歩いていったのはいいのですが、どちらも全く口を開こうとはしません。後で分かったことですが、彼も口数の多い方ではなかったのです。

居心地の悪い空気を感じながら床の板張りを睨みつけていると、少し上の方から視線を感じました。見上げてみると、あの一重瞼の眼が私をじいっと見つめているのです。私が首を傾げて見せると、義兄さんは気まずそうに

「ああ、いや。その……」

と目を泳がせるので、ますます怪訝けげんに思っていると、彼のその関節の目立つ人差し指で頬を搔かいて恐る恐るといった様子で口を開きました。

「……挨拶もまだだったな、と思つて。ごめんね」

そのしどろもどろな態度と、それに反して少ない言葉からきつとこの人も私と同じように喋しゃべりが下手なのだろう、とある種の親しみのようなものを感じました。可笑おかしくて思わず笑みを零すと、義兄さんも困ったように笑いました。それから初めましてと今さらな口上を滑らせて、またくすくすと顔を見合わせて笑っていました。それが確か義兄さんと初めて

交わした会話でした。

このように義兄さんは口下手で、どちらかと言えば気の弱いところのある人でした。それに比べて私の姉は自分の考えをハッキリ述べる鼻な柱ちゆうの強い性質せうでして、私も幼い頃に何度泣かされたか数えきれないほどです。親に組まれた縁談だからというのもあったのですが、そんな正反対の二人が営えいむ結婚生活はあまり順調とは言えないものでした。夫婦の間には会話も少なく、姉がよく母に『あの人は男の癖になよよしてるから嫌きらだわ』なんて愚痴ぐちっていたのを耳にしたものです。

だからなのか、義兄さんは姉や両親よりも私によく話しかけてくれました。夫婦より義兄弟と仲が良いというのはなかなか聞かない話ですが、実際私も義兄さんも姉より互いの方がウマの合うように感じたのです。

店では二人とも仕事がありますから雑談などしていられないですし、食事時も他の家族を差し置いて二人きりで喋しゃべるわけにはいきません。ですから私が義兄さんと話すのはもっぱら夜の、皆が各々自分の時間を過ひそごす密ひそやかなひと時のことでした。

私が風呂から上がって自室でそわそわと正座をしておりますと、トントンと優しく障子を叩く音がするので、それが、義兄さんが来たという合図でした。私がからりと障子を開け

ると、彼はいつもその痩せた頬に二つの笑窪を作って笑いかけてくれました。

話す内容と言えば取り留めも無いものばかりで、やれ最近茄子が美味しくなってきただの、やれ店に難癖をつける客が来ただの、そんなくだらない話をよくしていました。でも、そんな風に小さな声でゆったり話せる相手にはいなかったのですから、随分と楽しかったことを覚えています。

私がねだって義兄さんの身の上話を聞くことも多々ありました。田舎の小金持ちの家に生まれたこと。小さい頃は大人しい性格で友人ができなかったこと。レコードを借りて音楽を聴くのが好きだったこと。もしできたなら星の勉強をしてみたかったこと。時々詰まりながらも一通り話し終わると、彼はいつも困ったような笑顔を浮かべて

「僕の昔話なんか、聞いてもつまらないだろうに」と、私の頭を柔く撫でるのが常でした。私はそのちよつと冷たくて骨張った、義兄さんの左手が大好きでした。

逆に義兄さんが私の話を聞きたがることもありました。大人しい人でしたから聞き役の方が性に合っていたらしく、どちらかと言えばその時の方が楽しそうな様子でした。

ひとつ、印象的だったことがあります。ある時、

「幸仁くんは、好きな女の人とか居ないの」と聞かれたのです。私も十代の若い時分だったので、その手

の質問は散々投げられました。やはり義兄さんも同じことを聞いてくるのかと思ひ、そんなもの居ないよと少し飽き飽きしたような答えを返すと、

「本当に？ そんなこと言つて、本当は居るんじゃないか」なんて、正月に集まってくる親戚のような口ぶりで追及してくるものですから、うんざりして居ないつてばと冷たくあしらいました。実際、本当に好きな女などは居なかったですし、それまでに居たこともありませんでした。それを聞いた義兄さんは

「そうか、そうか」

と、やけにほつと安心したような表情で頷いていました。今思うとまるで娘に過保護な父親のような、そんな顔つきでした。あの緩んで喜びをにじませた目尻を未だにはつきりと覚えています。

そんな調子で私たちは半年もしないうちにとても仲の良い義兄弟になりました。退屈な家業と口うるさい家族に囲まれた生活の中で、義兄さんは私にとって蜘蛛の糸のような存在でした。少し大げさな言い方かもしれませんが、それほどまでに彼と過ごす時間は楽しく、穏やかなものだったので。

私と義兄さんがそんな風に時間を過ごすようになってから幾分か経った頃でしょうか。その日の私も、いつものように彼が部屋へ来てくれるものだと思って、落ち着き無く浴衣の袖を弄いじっておりました。

しかし、この時はいくら待っていても部屋の障子が開くことはありませんでした。今日も夜になったら来てね、などとはつきり約束を交わしていたわけでもありません。それでも、毎日のように私の隣で胡坐あぐらをかいていた彼の不在は、錐きりで穴を開けられたかのような小さな痛みと空虚な感覚を私にもたらしました。

何か用事でもあるのだろうか。それとも、昨日遅くまで引き留めたから嫌がられてしまったのか。義兄さんが来てくれない理由をあれこれ思い浮かべているうちに、じれったさだけが私にしつこく纏まとわりついてきます。そのうち大人しく畳に寝転がっているだけではおかしくなりそうな心地がして、つい自分から障子を開けてしまったのです。向こうが来てくれないのならこちらから出向いてしまおう、と。

薄暗い板張りの廊下を歩きながら、私は一種の恥ずかしさにも近い感情を胸に巢食くさわせておりました。義兄さんはあんなに私を構かまってくれているのに、たった一日放っておかれただけで我慢ならないなんて……。まるで聞き分けの無い子どもではないか。自分はこんなにも我俣わがまな性分だったのか、と

小さな驚きと羞恥が私の頬を紅べにくするのが分かりました。自戒のつもりで手の甲をぎゅつと抓つかってみても、義兄さんの居る姉夫婦の部屋へと歩く足が止まることはありませんでした。曲がり角に差し掛かった時、静けさの中に誰かの気配があることに気付きました。もしかして、と先走る足を止めたのはひとつの聞き慣れた声。

それが姉の声だ、ということにはすぐに気付きました。それに受け応えているのが義兄さんだということも。流石に二人の会話を割ってまで彼に駆け寄る勇氣は無く、私は隠れるように立ち止まっていました。そこからだと声は聞こえても話の中身までは聞き取れず、じれったく思いながらも廊下の静けさに揺らぐ二つの人影をそつと見続けていました。

二人の身体は今にも触れ合いそうなくらいに近く、暗がりの遠目でも分かる程に大きさの違う手が重なるたびに、私は思わず音を立てそうになる呼吸を潜めなければなりません。した。

不意に磁石が引き寄せられるように、二人の顔がそつと近づきました。あ、と思った刹那せつな、唇の影が触れるような接吻キスを交わしました。私はその時初めて、二人は今から夫婦らしい営みをするところなのだと理解しました。その事実を頭の片隅で認めながら、握りこまれた右手だけがやけに生々しく汗ばんでいました。

私は二人に気付かれぬまま、静まり返った自室へと戻りました。暑苦しい夜だと言うのに布団を頭からすっぽり被って、荒く息を吸って、吐いて、を繰り返しておりました。

母親の腹の中で眠る胎児のように丸まる背後から、私の知りえない二つの影が手を伸ばしていました。ひとつは、親族の情事的一端を見てしまった、という罪悪感にも近い興奮。汚らしい、と感じる少しの気持ち悪さだとか、人生で初めて見た他人の接吻せつぶんに対する熱い動悸どうきだとか。それらが絵の具のようにぐちゃぐちゃと混ざり合って、私の脳内をすっきり塗り潰していくのです。

そしてもうひとつは、お気に入りの玩具がんぐで遊んでいたら何も言わず取り上げられたような、そんなどす黒い淀みよど。この場で玩具と取り上げた手がそれぞれ誰に当たったのかは、考えなくてもすぐに分かります。胸の中でちらちらと燃える感情は、私を大いに戸惑わせました。どうして義兄さんに対して取られたくないなんて思うのか。だってあの人は男で、年上で、自分の義兄なのに。

聞き取れないくらいに遠かった、落ち着いた声。薄闇の中で揺らめく背の高い影。廊下の静寂にそっと落とされた、微かな水音。時間にして数分の場面を記憶の中で反芻はんすうしては、暑苦しい布団の中でそっと溜息ためいきを漏らす。この繰り返してました。

そのうち私の脳は勝手に場面の続きを作り始めます。まだ学校を出て幾年も経っていない頃でしたから、そういうことに対する知識など生まれたての赤ん坊にも等しいくらいです。しかし、無知を理由にして稚拙ちせつな妄想を止めてくれるほど、その時の私は理性的ではありませんでした。多分あの後布団に入って、着物を脱いで、それで……。いや、もしかしたら今……。ああかもしれない、こうかもしれない、と子どもの描いた絵のように下手な映像を瞼まぶたの裏に巡らせ、勝手に苦しくなる胸に手を添えました。嫌なら身内の情事なんて想像しなればいいのに。心の片隅では分かっているけれど、背筋を走る背徳と嫉妬はそれを許してくれませんでした。

過ぎる時間はいつもの眠気をもたらししてくれず、代わりに映像えいさうの一部分へ手を加えました。

——もし、義兄さんの相手が姉ではなく自分だったら？

思い浮かんだその仮定は、私の心臓をより一層跳ねさせました。もし自分がもう少し大きくなった女性だったら、きっと彼に抱いてもらえるのではないか。そうしたら今二人がしているだろうことをしてもらえないのだろうか。

こんなことを想像している自分がおぞましくて、恐ろしくて。でも、男の人へ欲情する自身への気持ち悪さよりも、拙つたい妄想に感じる興奮の方がずっと大きかったです。

相反する感情をせめぎ合わせながら、長い夜は更けてゆき

ました。いつの間にか眠りに落ちていたようで、纏わりつく布団の熱気と不快感で目を覚ましました。未だ鉛のように重い体を起こすと、腿の方がじつとりと湿っていることに気が付いたのです。汗でもかいたのだろうかと不思議に思つて一拍、私はその不快な湿り気の正体を悟りました。白く冷えた、昨夜の妄想の残骸。私は昨晩に汚らしい妄想に耽つたことを心の底から後悔し、何も知らない義兄さんへ小さく『ごめんなさい』と呟きました。

その日の夜、義兄さんはいつも通り私の部屋を訪れてくれました。細い頬に浮かべられた笑窪に私は昨晩の醜い嫉妬と妄想を思い返すことしかできず、碌に彼の目を見ることも叶いませんでした。おどおどと義兄さんの背後にある障子を見ることしかしない私は、さぞかし可笑しく見えたのでしよう。

「どうしたの？ 随分顔が紅いようだけど」

彼が首を傾げて問うたのも当然のことでしょう。私を心配して額に伸びる左手に慌てて顔を背けました。一層不審そうに眉をしかめる彼へ、何か言わなければという焦りが唇を勝手に動かしました。

——今日は、姉さんとしなくていいの？

自分でもどうしてこの時、こんな言葉が出てきたのかは分かりません。ただ、この台詞が音になった瞬間のしまった、という後悔とどこから熱く血が吹き出すんじゃないかとい

うくらしい羞恥、そして一瞬にして見開かれた義兄さんの双眸だけはよく覚えています。見たのか、と小さく動いた薄い唇も。

私は失言を取り消そうと、弾丸のような早口で言い訳を並べました。口が滑った、忘れてくれ。そのような御託をひたすら並べながら、顔にかあつと血が集まっていくのが自分でも分かりました。

義兄さんは黙つて私の言葉の羅列を聞いていましたが、不意に左手を私の頭へ載せました。その柔らかい感触は私の口を塞ぐのに十分な効力を持ち合わせていました。溢れ出す言葉を急に止められて真っ白な頭に、あの甘やかな声が追い打ちをかけてきます。

「そんなに焦らなくてもいいよ、気にしてないから」

そんな言葉ひとつでは私の強烈な恥ずかしさを打ち消すことなどできず、でも、だって、と煮え切らない言い訳が零れ落ちます。ふふ、と溜息にも近い小さな笑みが漏らされた後に、

「可愛いなあ」

お喋りな口へ人差し指を添えるように、ぼつりと。確かに義兄さんの唇はその六音の形に動きました。数秒は何が起こったのか分からず、長い前髪の奥で笑う彼の一重瞼を見つめることしかできませんでした。少し遅れて脳髓へその言葉が届

いた瞬間、かっと火が付いたように体が熱くなるのが分かりました。自分は今、何を言われた？ 今、その言葉に対してなんと思った？ 混乱の渦の中で浮かぶ疑問は炎に燃やされ、私に考える隙を与えませんでした。

義兄さんは暫く^{しばら}左手をそのままに、何も言えない私を待っていてくれました。鼓動が落ち着いた拍を取り戻し、胸中の炎が燃え尽きた後に残ったのは、可愛いなどと言われて生まれた確かな喜び。

どうして自分は今、義兄さんに可愛いと言われて嬉しく思っているのか。分からなかったけれど、この日の傾いた部屋の中で、髪越しに伝わる熱の心地良さだけが確かに私を包み込んでおりました。

当時私たち家族が住んでいた家の庭には、風が吹いたらすぐ倒れそうな細かい椈もみぢの樹が一本生えておりました。それはどうも成長の遅い個体だったようで、周りの樹木が色を付ける時分になっても一向にその鮮やかな緑を染めようとせず、道の木々がすっかり丸坊主になった頃によく燃やした紅の色で目を楽しませてくれる、そんな変わった椈でした。

それを家に来たばかりの義兄さんは知らず、ある日私に聞いてきたのです。

「あの椈はいつ赤くなるの？ もう随分と青いままだけど」
私はその樹のことを説明してやると、彼は興味深そうに私の部屋に備え付けられた窓からその青い葉を見つめていました。

それから毎日庭の方をちらちらと見てはその樹を気にしているものですから、私は義兄さんへそんなに椈が好きなのかと聞いてみたことがあります。すると、

「椈自体が好き……というよりは、あの葉っぱが赤くなるのを待っているのが好きでさ。まだかな、って待ち遠しく思っている時間が一番楽しく感じるんだ」

という答えが返ってきました。そのあまり聞いたことが無い理由に当時の若くて単純だった私はすっかり感銘かんめいを受けてしましまして、それから気取っては庭の相変わらず青い椈を眺める時間が長くなりました。

そうして二人揃そろって庭の椈を眺めているものですから、自然と会話の内容もそれについてのことが多くなっていきました。庭の青楓あおかえでについて話すこともあれば、道端のとつくに色づいた木々を羨うらやむこともありました。

しかし、当時の私が住んでいた町には所々に大きくも小さくもない椈が数本生えているつきりできて、庭の一本も含めて見る者の心を感嘆させてくれるような、そんな立派な椈の大群はありませんでした。

そんな小さな不満を、ある日義兄さんと話している中でぼろりと零こぼしたのです。すると彼は少し考えるような素振りを見せた後、私の目をじっと見つめて

「じゃあ、見に行ってみる？ 二人で」

と、頬ほおを緩ませました。何でも、少し離れた町に綺麗な椈の名所があるらしいと店の常連の年寄りから聞いたそうです。私は喜んでその誘いに乗りました。それはようやく色づいた葉を見られるという期待もありましたが、何より義兄さんと二人で出かけられることが嬉しかったのです。

私が幼子のようににはしゃいでいますと、義兄さんは愉たのしげに目を細めていつものごとく私の頭を搔かき撫なでてくれました。いつも仕事の手伝いで忙しかったので、二人きりで出かけることなどなかなかできなかったのです。

行くのは次の水曜日ということに決まりました。そこから

私の浮かれっぷりといったら、まるで新しい玩具を買ってもらった子どものように今思い出しても耳まで紅くなるのが分かるくらいです。ですが、それほど浮足立っていても義兄さんとの約束は他の誰にも決して口外しませんでした。何故なら、私は彼と二人で出かけることにある種の後ろめたさのようなものを感じていたからです。ただ男二人で少し遊びに行くだけです。何も悪いことはありません。それでも、結婚したばかりのうら若い女性をたぶらかして遊びに連れていくような……、そんな罪悪感が、期待と高揚感の裏にずっと燻ぶっていました。

私は隣町へ映画を見に行く、義兄さんは旧友に会いに行くと他の家族には伝えました。そう言おうと提案したのは義兄さんの方でした。今考えると、きつと彼も私と同じ疚しさを感じていたのでしょう。

一日千秋の思いで待ちわびていた水曜日の朝。私は普段よりも早く目が覚めてしまい、自室で着るものを長々と考えていました。自分でも女々しいだろうか、なんて恥ずかしさがありました。それでもそわそわとして何かをせずにはいられなかったのです。

私たちは一緒に家を出ることはせず、義兄さんが先に、私が後に出発すると予め取り決めていました。（これも義兄さんの提案でした）ですから私は太陽のすっかり昇りきった頃

に、まるで留守の家へ泥棒をしに行くかのような足取りで最寄りのバス停に歩き出しました。

水曜日の午前でしたから皆仕事やら学業やらに励んでいたらしく、バスの中にも走る道にも人はまばらでした。同じ頃に私は義兄さんと遊びに行く道中ということで、多少の背徳を含んだ楽しさがありました。過ぎ去る金色の田んぼを眺めながら独りこみ上げてくる笑いを嘔み殺していたので、何とも奇妙な姿だったことでしょう。

そうして数十分は揺られていたでしょうか。待ち合わせのバス停が近づいてくると、ぼんやりと立ち尽くしているひとつの人影が見えました。カンカン帽を深めに被っていたので顔は見えませんでした。そのすらりとした立ち姿で人影が義兄さんであることが一目で分かりました。

早く停まってくれと心の中で焦るものの、私の都合など知らないバスは秋の日和に合わせたのんびり走るだけでした。ようやくタイヤが止まって弾かれたようにバスを飛び出した私を見て、義兄さんは可笑しそうに吹き出しました。

「そんなに急がなくても、僕はどこにも行かないよ」

そう微笑む彼は普段の楽そうな着流し姿ではなく、紺の着物の上から生成色の羽織を着こなしたよそ行きの格好をしていました。義兄さんは背の高い人でしたから、結婚式の時の紋服といいきちんとした服装が本当によく似合いました。こ

の時も帽子の鏢をつまんで被り直す、その羽織の袖の綺麗な
こと……。同性ながら思わず見惚れてしまったほどです。

目的地へと向かう道すがら、吹く秋風と静寂が柔らかに私
たちを包み込む世界。その中で義兄さんとぼつぼつ会話を交
わしているだけで、まだ樹木の一本も見えていないのにとても
幸せな気分になれたのです。

その栂の名所というのは、降りたバス停から十分ほど歩い
たところがありました。秋以外の季節では何の変哲も無い地
味な小山でしたが、時期が来ればその身を紅く燃やすのでそ
れはそれは美しい栂を見ることができ、知る人ぞ知る絶景
の場所でした。

稚拙な表現ですが、その光景はそれまでの十数年という短
い人生の中で一番の美しさでした。所狭しと空へ枝を伸ばす
木々と、赤と青の斑に染まった空。踏むたびにふかふかと柔
らかい真つ赤な地面。今でも目を閉じるとその風景が思い浮
かんできます。

見たことも無い落葉だらけの景色にはしゃぐ私と、それを
ただニコニコと見つめている義兄さん。

「幸仁くんがそんなに喜んでくれるなら、連れてきた甲斐があ
ったなあ」

そう嬉しそうに言ってくれるので、私もますます上機嫌に
なったのです。

一通り歩き回った後、私たちは一際大きな樹の下で腰を下
ろしました。しんしんと赤い葉っぱの降り注ぐ、天高く静け
さの響く二人だけの世界。隣のごく近い場所に感じる義兄さ
んの熱と息遣い。私はそのすべてを一身に感じながら、この
まま二人閉じ込められて出られなくなってしまえばいいのに、
なんて絵空事を馬鹿みたいに心中で願っておりました。姉も
両親も邪魔してくることは無く、私と義兄さんの二人きりで
す。その状況にどうして幸せを感じずにいられるでしょうか。

惚けた私が右隣に座っている義兄さんの横顔を見つめてい
ると、気付いた彼が目を合わせて口角を緩ませます。初心な
乙女のようなだった当時の私は、その甘い詩的な時間にすっ
かり酔ってしまいました。普段だったらちやちやな理性が引き
留めてしまうことを、してみたいと思ってしまうのです。

それは、義兄さんを名前で呼ぶこと。姉や両親はなんとで
もないようにその名で彼を呼びますが、私には許されていな
いことでした。義兄さんなどという私を義弟という立場に縛
り付ける、常識的でくだらない名称を使うことしかできなかつ
たのです。

私は意を決して震える唇を開きました。僅かに作られた隙
間から、義兄さんの名前を意味する四文字を零して。でも呼
び捨てなんてできないから、余所余所しい敬称をそつと付け
足して。

私の勇気が音になった瞬間、私の目を見つめていた義兄さんの双眸が見開かれました。馬鹿な私は、きつといつもみたいに笑ってこの我俣を受け止めてくれるものだと思いで疑いませんでした。しかし、彼は驚いたようにも見えない表情で暫く固まったまま、反応を返そうとはしませんでした。

「駄目だよ」

ようやく聞こえたのは、今にも消え入りそうな震え声。その時、私は初めて義兄さんの臉の縁が赤くなっていることに気が付きました。

「義兄さん、だろう」

——やっぱり、許されなかった。まるで気持ちよく眠っている最中に頬をひっぱたかれたような、そんな気分でした。

私は悔しさにも似た感情を胸の中に巣食わせながら、義兄さんの震える睫毛を見つめていることしかできませんでした。

けれども、私はどうして、なんて情けない駄々をこねることだけはしませんでした。だって、分かっていたから。義兄さんを義兄さんとは呼んではいけない理由など、痛いほど理解していたからです。それでも、一縷の望みにかけて都合のいい夢を見てみたかった。ただ、それだけなのです。

それから二人揃って白痴のように、相変わらず降っては微かな音を立てる椀を見つめているだけでした。その私の胸中に、先ほどまでのような幸福感など一握も残ってはいませ

んでした。

それからどれほどの時間が経ったでしょうか。どちらからとも無く、そろそろ昼飯を食べに行こうという話になりました。立ち上がって裾に付いた枯れ葉を払い、一步踏み出そうとしたその瞬間にあの静やかな男声が私を引き留めました。

「幸仁くん、……手、繋ごうか」

その私を見つめる瞳は期待、背徳、欲望、後ろめたさ……たくさん感情がぐちゃぐちゃに混ざり合った、そんな色をしていました。眉間に浅く刻まれた皺のせいで、少し泣きそうにも見える表情。

「転ぶといけないから、山を下りるまで。ね」

その台詞は彼が自分自身に言い聞かせた言い訳にも聞こえました。差し出された大きい手に、甘い誘惑に、どうして私が逆らえたでしょうか。義兄さんの浅はかな建前を自分へ言い聞かせて、その左手を柔く握りしめました。

私の瘦せた貧弱な手とは違い、遅く鋭く関節の目立つ、血管が力強く走る手。いつも頭を撫でてくれた手が右の手のひらを握っているという事実は、そのまま心臓の拍を止めてしまふかのよう。すべての神経が右手に集まったかのように、義兄さんの指の一本、爪の先までを感じ取ろうと手が熱くなるのが分かります。疚しさと嬉しさとある種の興奮のようなものが入り交じり、あの義兄さんの瞳と同じ色が私の脳髓を溶

かしきってしまいそうなほどでした。

私は今度こそ、この帰り道が永遠に続けばいいなどという絵空事を真剣に願っていました。私の手を覆う暖かな彼の存在を、ずっとずっと独り占めしていたかったです。私も義兄さんもただ黙って帰る歩幅を狭めながら、今だけとは互いの熱を大事に握りしめていました。最後の一步を下りた、その瞬間まで。

私のちっぽけな願ひ事はもちろん叶うはずも無く、私も義兄さんも幻に包まれたような紅葉の真中から日常へと帰ってきました。つまらない家業、くだらない会話、あの紅い世界に比べるとすべてが霞んで見えます。

ただ、ひとつだけ変わったことがありました。毎晩のように僕の部屋へ来てくれていた義兄さんがあまり顔を見せてくれなくなつたのです。不思議に思つた私が駄々をこねても、彼はまた今度ね、といつもの困つたような笑顔を見せるだけでした。

一緒に話してくれなくなつただけではありません。普段の生活でも、私を避けるようなどこか余所余所しい雰囲気がありました。最初は彼の行動を不可解に思いましたが、その理由はずに分かりました。

ある夜のことです。その日は秋の中でも随分と冷え込んだ晩で、綿を詰め込んだ布団を頭から被つてもなかなか寝付けませんでした。冷たい爪先を擦り合わせても襲い来る寒気はしのげず、目が冴えるばかりで。白湯でも飲んで温まろうと布団の中より冷える廊下を歩いておりました。裸足で歩く晩秋の板張りは痛いほどで、踵を上げてせかせかと両足を動かしていると、か細い子犬の唸り声のようなものが聞こえてきます。

どこから聞こえてくるのだろう、と耳を澄ませば、それは廁

からだと分かりました。その唸り声をよくよく聞いてみると、どうやら誰かの鳴咽であるらしかったのです。

私はどうせ父親が飲みすぎたのだろうと思つていたので、翌朝にそれは間違いだと判明しました。結局寒さに邪魔をされて眠れないまま迎えた朝。止まらない欠伸を噛み殺しながら朝飯の並ぶちやぶ台へ向かうと、いつもは早起きな姉の姿が無いことに気が付きました。丁度料理を運んでいた母に問うてみると、

「あの子、昨日は一晚中吐いてたみたいだから」

続けて、眠い朝とは思えないほどの嬉しそうな笑顔で桃子を労わってあげてね、と言うものですから、幼かった私にもその意味が分かつてしまいました。恐らくだけど、姉の腹には夫婦らしい営みの結果が宿っている。義兄さんが時々私の部屋へ来ない夜がありましたから、当然の流れでした。

その事実は私に少なからず衝撃を与えました。まるで脳髓を直接揺さぶられたような、そんな気分。揺さぶりの余波は、私から朝食の味、晩秋の寒さ、母の話。それらをすべて奪つてゆきました。

その夜、義兄さんは私の部屋へ来ませんでした。廊下に鳴咽を響かせる姉に対して、彼は随分と熱心に介抱してやっているようでした。

私はいつかの熱帯夜と同じように、あの時よりは厚くなつ

た布団を頭から被っておりました。頭の中でぐるぐると考えているのは、もちろん義兄さんのこと。

姉の妊娠という一大事は、私に当たり前の事実を改めて目の先に突き付けたのです。やはり義兄さんは男で、姉は女なのだと。互いがどう思っているかは別として、二人は夫婦で子を成せる関係であるのだと。私は所詮、彼の義弟という立場でしかないのだと。

そんな恋愛感情にも近い義兄さんへの思慕を打ち砕かれた悲嘆もありましたが、それ以上にどこかほっとしている自分が居ました。あの頃の若い私はその若さ故に義兄さんへのめり込んでいたところもありましたが、その反面でどこか後ろめたかったのだと思います。同じ性別で、一回りも年上で、しかも血縁の結婚相手に当たる人です。駄目だ、この気持ちはどこかで断ち切らなければいけない、という自制が働かないわけがありませんでした。姉夫婦の営みの結果は、そんな私にとって絶好の機会のように思えました。

けれども、ここまで燃え上がった気持ちを簡単に捨てることもできなかったから。胸の中に淀む悲しみを溶かして捨てるように、静かに頬へ雫を伝わせました。後はもう、この淡い感情を過去のものにできるように……。

次の日、私の密かな決意など知らぬように障子が二回叩かれました。いつもより狭く障子を開けると、これもまたいつ

ものように頬へ笑窪を浮かべた義兄さんの笑顔がありました。その笑顔に鼓動が愉しげに跳ねてしまうのも分かったけれど、それを抑えるように背中の後ろで右手を握りしめます。

「昨日はごめんね。今日はゆっくり、幸仁くんの相手してあげられるからさ」

どうにかして追い返すつもりだったのに、単純な私は細められた一重瞼で笑いかけられただけで彼を部屋へ上げてしまったのです。畳に胡坐をかいて、普段のように私がいかに嬉しそうに話し始めるのを待っている義兄さん。私が何も言い始めずに視線を彷徨わせているのが不思議だったのでしょうか。二人の間に少しの沈黙が流れた後、義兄さんが口を開きました。

「どうしたの？ 今日随分と大人しいね。……ああ、もしかして昨日僕が来られなかったから？ それでちよつとご機嫌斜めだったりするのかな」

駄々をこねる子どもを宥めるような、大人の余裕を携えた微笑み。その台詞に、私は姉のことを思い出しました。そういえば今日は彼女の体調は大丈夫なのかと。今日の姉さんは大丈夫なの。そう問うと、何が可笑しいのか彼は道端の野良猫を撫でるような目つきで笑みを零したのです。

「やっぱり。昨日は構ってあげられなかったから拗ねてるんだろう？ あれは仕方なかったんだよ、桃子さんが気持ち悪

くて眠れないなんて言うから。今日はあの人じゃなくて君だけの相手をするからさ」

私は言葉の通じない異国人相手に話をしていようような気分でした。自分は拗ねているなどと一言も言っていないのに。大体、昨日はあんなに姉を親切に介抱していたのに、これではまるで仕方なく看病してやったような物言いです。彼の左手がすうつと自分の頭へと伸びていきます。

その間に、私の脳裏へ今までの出来事がぼつぼつと思い出されてゆきました。姉と接吻をしておきながら、その裏で私に可愛いと言ったこと。家族には内緒で、二人で手を繋いだこと。そして今、姉を優しく労わりながら私に対してはこき下ろしていること。

愚かな私は、そこで初めて気が付きました。ああ、この人は結局姉にも自分にもいい顔をしたいだけじゃないか！

——気が付くと、右手は勝手に彼の頬を勢い良く叩いていました。少し赤く腫れた頬の上に、驚きのせいか平常より面積の多い白目を縁取る睫毛が震えていました。

やってしまった、という後悔に唇を震わせた後、私は勇気を出して義兄さんに告げました。もう部屋には来ないでほしい、義兄さんは自分ではなく姉さんと仲良くやってくれ、と。

私の言葉に義兄さんは何も言わず、そっと障子を開けて部屋を出ていきました。その背中では悲しんでいるようにも、怒っ

ているようにも見える背中でした。廊下に響く歩幅の大きな足音を聞きながら、これで終わりだ、終われたんだと頭の中で何回も自分へ言い聞かせておりました。

足音がすっかり遠くへ消えた頃、私は廊下に誰もいないことを確認して部屋を出ました。義兄さんとたくさん話を話しては笑ったあの空間にいたら気がおかしくなってしまうので。

かといって当てがあるわけでもありませんでした。廊下の静けさを壊さぬよう忍び足で歩いているうちに、居間から続いている縁側に辿り着きました。そこには夜空に穴を開けたかのように浮かぶ丸い月と、それに照らされた一本の椀の樹がありました。そう、かつて義兄さんと話題にしていたあの椀です。

めつきりと冷え込んだ気候のせいでしょうか、いつまでも青い頑固なこの椀も、流石に葉を落とし始めていました。地面は降り積もった枯れ葉に染められ、僅かな葉が枝に弱くしがみついているだけでした。

私は縁石に添えられていた草履を突っかけ、椀の根元にそっと駆け寄りました。しゃがみ込むと、夜闇に溶けあいそうで馴染み切れていない赤茶の葉っぱ。一枚を拾い上げてよく見てみれば、所々を虫に食われた土塗れの汚い枯れ葉でした。

私の脳内には、義兄さんと椀を見に行った時のあの鮮やか

な紅が広がっておりました。薄水色うすみずの空に泳ぐい雲と、それらを斑まだらに染める椀。なんと美しく、心を揺さぶってくれる景色でしょうか。それに比べて目の前に在る錆色さびいろのなんと汚いことでしょうか。

いつそ見事なまでの色の対比が、私には義兄さんと自分の関係を揶揄やゆされているように思えてならなかったのです。短い間だったけれど美しく美しかった自分たちと、たった今終わってしまった自分たち。まるで椀が色づいて、枯れては散ってゆく過程のようではないかと。

私はもう流し終えたと思った涙を、枯れ葉へと落としました。笑顔で溢れるあふ義兄さんとの思い出を、優しかった義兄さんの左手の感触を、これからはきつと抱かないであろう義兄さんへの淡く純粹な想いを。涙に乗せて、いくつも枯れ葉に染みこませてゆきました。

今は昔、ある晩秋の夜のことです。

あれから私は少しだけ年を取りました。身体はもちろん、自分ではよく分らないけれど、恐らく心も当時に比べて大きくなったように思います。

今思い返せば、あの頃の私はなんと青かったことでしょう。口先だけの甘い言葉に惑わされて、許されるはずのない恋をしたのです。年齢、性別、義兄弟という関係。私が抱いた愚かな劣情は、それらの壁によって燃え上がりはしましたが、決して成就することのない一時の幻だったと今なら分かります。

できることなら若かった私に言ってやりたい。お前はただあの人に都合よく踊らされているだけだと。大切な家族への背徳を抱いてまで見る夢ではなかったと。今さら悔いたところで、何かが変わるわけでもありませんが。

あの後、私は姉夫婦の子が生まれる間際になって実家を出ました。義兄さんとは目を合わせることもさえ無くなりましたし、目の覚めた私が彼と暮らすという状況に耐えられなかったのです。両親も生まれる孫のために部屋を開けたかったようで、私の申し出を二つ返事で了承してくれました。

父の伝手を頼って新しい土地で数年。初めは戸惑った人の多さや言葉の違いにもすっかり慣れ、あの悪夢のような秋を忘れられたと思つた頃でした。こんな何のとりえも無い私にも、ひとつの縁談が舞い込んできました。背が低くて白い頬

に浮かんだ笑窪の愛らしい、控えめな女性です。式の前に一度会っただけなのに、私にはとても勿体ないと思わされるくらいなの。

すぐに話は進み、とうとう翌日は結婚式というところまで来ました。今の私は明日から始まる新生活へ胸を躍らせ、輝かしい未来へ希望を抱いて――

いなければいけないはず。それなのに。

どうして今になって、もう忘れたはずの冷たい左手を思い出すのか。憎らしいはずのあの笑顔に胸の締め付けられるような思いをするのか。

私はとても恐ろしいのです、実はとんでもない思い違いをしていたのではないかと。自分勝手に弄もてあそばれてもなお、紅葉の中で見た悪夢ゆめからまだ目を覚ませていないような気がして。

環境が変わるから、ちよつと不安になっているだけだ。そう言い聞かせても、幸仁くん、と呼ぶあの静かな声が私の血潮を熱く巡らせてくるのです。

違う、あれはまやかしかつたんだ。若かったが故に犯してしまった罪で、二度と繰り返してはいけない後悔なんだ……。

私の中で未だ煌々こうこうと紅い椀が、恐ろしくてたまらない。